

神奈川文芸賞 [2022]

リクルートスーツを着ていると、信じられないくらい肩がこる。べんと伸びると、空調で冷えた背中がこわばって軋む。十三駅分の疲労が全身に蓄積されていく。

桜木町駅一番線のホームでは流れこんだ外気と人々の体温とが溶け合い、蒸し暑い空気が充満していた。イヤホンを外した途端、隅々まで世界が鮮明になり、一気に情報が流れこんでくる。捉えきれないほど重なり合った会話は喧騒という形で収斂し、私の中に吸いこまれていく。発車に伴って空間全体が震え、頬いっぱいには生温かな風を受ける。

本道なら、今頃は家でグラマーを浴びているはずだった。私は朝いちばんの企業説明会を済ませ、乗換駅である東京駅にいた。しかし、一件のメールが私の掃路を中断した。「選考結果のご連絡」という件名を読んだ時点で、私は、何かひやりとした焦燥を予感していた。通知をすらすら「開く」を押す指先が微かに震える。スマホは私の逡巡を感じせず、すくなくメールを表示した。

「大変恐縮ではございますが、大浦様の今後益々の活躍をお祈り申し上げます」

通路の脇に寄り、何度も文面を確認した。面接は会心の出来だった。上手くいった、と思っていたのだ。鼓動が体の中で反響する。たまらない気持ちに耐えかねて私は衝動的に京浜東北線に飛び乗った。それが一時間ほど前の話だ。

『線路は続くよどこまでも』のメロディーを背に階段を下りる。この一帯はブランドマークタワーを始めとする商業施設や遊園地が並ぶ。そのため、辺りはカップルや家族連れが多く、駅前広場も大いににぎわっていた。夏らしい鮮やかな服装の数々は、熱帯魚の尾ひれを彷彿とさせる。人々は思い思いに笑顔を浮かべ、めいめいの幸せを謳歌しているように見える。イヤホン、つけておけばよかったかな。口の中がきゅんと苦い。うっむいたら顔を上げられなくなった。目の裏が熱く滲む。引きつった喉奥に気づかないふりをし、肺の奥まで酸素を満たす。夏の熱気の中、ふいに鼻腔を海の匂いが掠めた。青く、やわらかく、よく馴染んだ気配。五年前の記憶によく似た、匂い。パンプスのかかとが痛い。踏み出す度にひりひりして、心も一緒にきゅんと痛む。

五年前、つまり私が高校三年生だった頃、私は横浜の予備校に通っていた。

私は部活に入っておらず、放課後になると予備校に直行して自習室に落ち着くのが日課だった。角の席が私の定位置だった。空調の真下にあるため、暑がりの私は快適に勉強することができた。体温調節しにくいためか、他の生徒も寄りつかず、のびのびとノートを広げられるのもよかった。そういう生活を二年生から続けていた。ところが、二年生の冬、背中合わせの席に男子生徒が座るようになった。私

は日課を顧みず内心ちよびり憤慨したが、次第に興味を持った。それで、教室で彼と居合わせることもなく会話を聞いた。

男子生徒は原くんだった。

下の名前が知らない。彼は鎌倉にある男子校の生徒で、多弁ではないがはつらつとして、健康的な雰囲気だった。ハンサムではなかったが背が高く、名前を呼ばれると後髪に振り向く。左頬にふたつ並んだ

それから、自習室などで彼が出入りするところもよく観察していた。彼は清潔で、とても素敵な感じのする香りがした。白いシャツは原くんのさっぱりとした襟足や薄く日焼けした首元によく映えていた。本人もそれをわかっていたのかも知れない。

十七歳という歳は、決して希望に満ちているだけではない。前途は目いっぱい開けているが、不確定な未来に対する不安でいつも心が重かった。何にでもなれるのではなく、何者でもないが、た。いつも胸の奥がこもるように苦しかった。その

と出くわした。狭い廊下だったので、出会い頭に原くんの肩に頭をぶつけた。さっきまで擦っていた目の縁がひりひりと痛い。私はぎゅんとハンカチを握りしめた。端の方に刺繍された鳥がゆるく濡り、私の手の中をぐちゃぐちゃになった。薄暗がりの中、原くんはびっぴりしたような顔で私を見た。

「出よう」と出さぬけに原くんは言った。そして、私がきょとんとしているのに気づき、ゆっゆっと言いつつ、それは確定事項を伝達するように、はつきりとして頼もしく口調だった。

「出よう、出よう」

「駅の方に、ちょっと。疲れてる。」

「うん。でも……」

「気分転換しようよ。そんな顔じゃ年号も入ってこないじゃないか」

私たちは荷物をもとめて自習室を出た。横浜駅まで歩く道中、原くんはいつになく無口だった。私はこんな風に女の子に声をかけるのだから、手馴れたような印象さえ受けたのだが、そういえば原くんが女子生徒と話しているのは一度も見たことがない。勢いで突っ走らうとして、鼻梁の通った横顔は、緊張しているように見えなかった。予備校は西口にあった。原くんは電車に乗らず駅の中をつらつと東口に抜けた。

商業施設を通り抜けると、空がどんどん開けて、空気が広がりを帯びていくのがわかる。平日の昼下がりで、人通りはまばらだった。二十分ほど歩き続け、汽車道の中ほどで原くんは足を止めた。欄干に寄り、並んで海の方を向く。原くんがベクトルを取り出したので、私もなんとなく真似をした。陽光を受け、原くんの顔で汗の粒がきらきらと光った。

「意外と歩けるもんだろ」

「うん。こんなに近づくって知らなかった」

梅雨が明けてすぐだったが、辺りは夏の気配が色濃く。肌を包む熱気の中、海の匂いが溢れるように飽和している。青く、やわらかく、よく馴染む香りだ。遠くへ回る観覧車を眺め、私たちは穏やかな時間を享受していた。

原くんは、「海と空の真ん中に線があるだろう」とつぶやいて、ふんと前に手を伸ばした。

「そこに手を伸ばす」

「うん。それで、深呼吸する。自分の中で不安なところが真っすべくなるんだ」

私は真っすべに手を伸ばした。水平線に指先を合わせ、深く深く息を吸いこむ。自分の内側が均衡を取り戻していくのがわかる。海が滲むように延長され、私の心を抱きしめた。

「おれも、辛いとき来るんだ。とっついてもいいよ」

今、私の目の前には海がある。目の裏が熱い。引きつった喉奥をそっと押さえて、肺の奥まで酸素を満たす。夏が空いっぱいには広がり、すくと遠く、海と曖昧な色合いで混ざり合っている。その境界に向け、両手をもたげた。前に伸ばす。あのとき原くんがそうしていたように、そして、私がそうしていたように。大きな呼吸を繰り返す。水平線を定規にして、心を真っすべに戻して行く。

陽光が、橙の色彩を深めていく。喧騒や行きかう人々の微笑みを、とっつりと優しい色に溶かして行く。やわらかな青が橙に溶け、痛みがそっと染みこんでいく。隅々まで鮮明な世界が、私を抱きしめるように、穏やかな温度になっていく。原くんの、弾けるような笑顔と、その奥にある思慮深いまなこを思い出す。

あれきり原くんとは話さなかった。顔を見れば会話はしたが、会話はなかった。彼の周囲には彼の学校の人がいたし、私は相変わらず持ち前の人見知りを見舞っていた。受験期で顔を合わせる機会がなくなり、そのままお別れになってしまった。連絡先の交換はおろか、挨拶することもできなかった。

彼は今どこで何を学んでいるのだろう。一度、関西の大学の赤本を持っているのを見たので、今はもう神奈川にいないのかも知れない。また白いシャツを着ているのだろうか。えくぼが二つ浮かぶ横顔で、海を見つめているだろうか。そうして、せつしよもなくなると、水平線を定規にしているのだろうか。

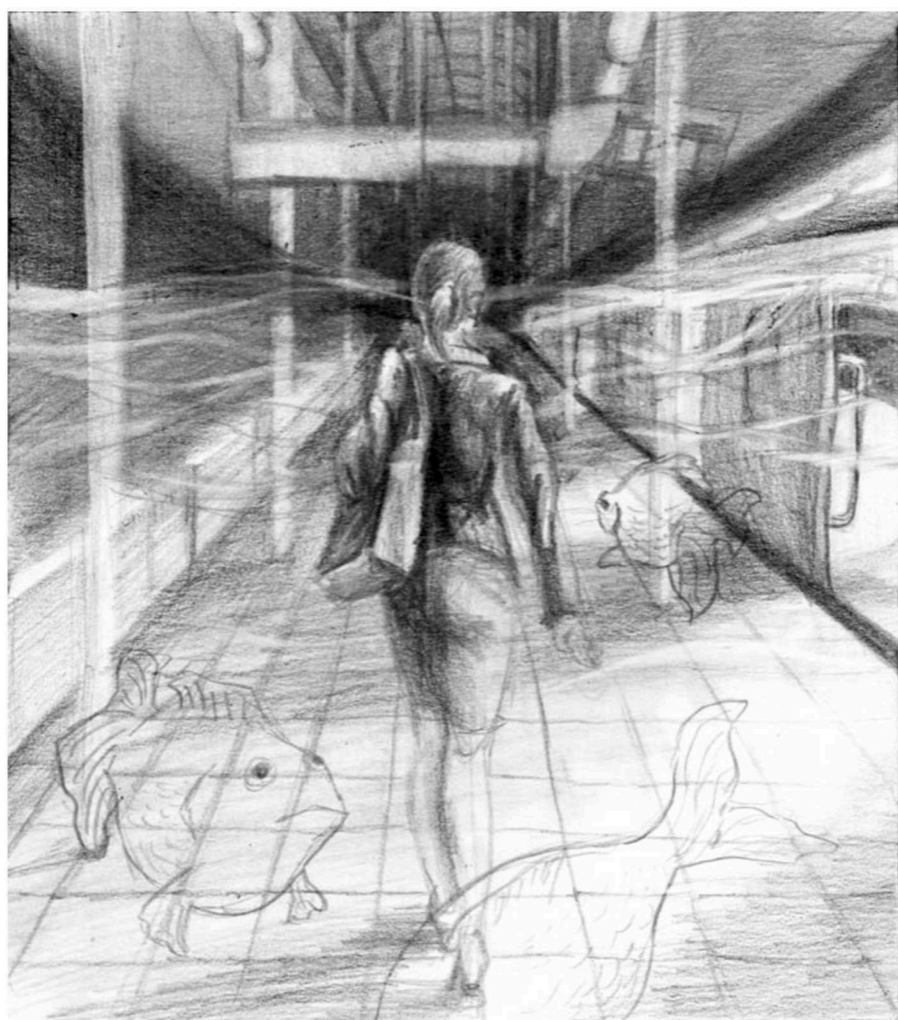
高く旋回している。夕陽が空を染めあげており、その真ん中を真っすべに進んでいく。翼を打つ音が力強く響く。よれたアイシャドウと汗だくのワイシャツで、私は、前を向いている。

講評

描写や場面の動かし方、構力など、筆力が大変素晴らしいです。白いシャツという特徴的なモチーフがうまく使われて読者に印象づけられています。文章には推進力があり、非常に洗練されていますね。水内さん独自の魅力だと思える題材を得られれば、人を惹きつける作品となるのではないのでしょうか。水内さんの書かれた長編も読んでみたいと思いました。(県立神奈川近代文学館スタッフ)

予備校の様子などのほのほの感、原君との時間の繊細な描写、主人公の心情に胸を打たれました。現在から回想シーン、再び現在へという構成がうまい。若い世代ならではの生きることの苦しさに共感しました。五感に訴える表現が秀逸でした。(かなとも会員コメントから抜粋)

U-25小説部門：最優秀賞
水平線を定規に
水内治子



イラスト/福田 茜 (県立相模原弥栄高校美術部1年)

だえくぼがかわいかった。

原くんはいつも白いシャツを着ていた。彼の制服はまっぴらな開襟シャツだったが、私服も決まっていた。白シャツだった。すべに白シャツというあだ名がついていた。あまりにも正直だが、当の本人は「教頭っほくてこい。覚えやすくて」と、快活に笑っていた。教頭というのは『坊ちゃん』に出てくる赤シャツのことだ。彼は本をよく読む人だった。

で、仲間意識のようなものはあった。一方的な親しみは表に出さず、黙って見守るだけにとどめた。

原くんは初めて話したのは、三年生の夏だった。その日は模試の返却日で、私は散々な結果を叩きだしていた。数字やアルファベットの印字が、第一志望はおろか第二志望合格も厳しい事実を、明瞭に突きつけていた。順位表をファイルに突っこみ、トイ

頃の私は、自分の価値を成績でしか見出すことができなかつた。高校と予備校を行き来するだけの、狭く偏っていて、閉鎖的な世界で生きていた。

十七歳、という言葉はまぶしい響きだ。町を弾むように闊歩する制服姿は若く明るい。大人は、その輝かしさに、いつも光を見出そうとする。かつては自分たちも十七歳だったのに。トイから真っ赤な目をして出たとき、原くん